

人 格 部 門

パーソナリティ研究この1年

松山安雄・秦 一士

(甲南女子大学)

本稿では、1991年7月から1992年6月までの1年間のパーソナリティ領域における主要な研究動向を述べることにする。

まず、日本教育心理学会の年次大会についてふれると、今回の総会において人格部門で実際に口頭発表された件数は49件であった(発表取消し1件)。人格部門ではどの会場も参加者が多く、活発な討議が行われていたという印象をもった。ところで前年度の人格部門の研究動向を担当した大野(1992)は、年次大会の人格部門における口頭発表件数が例年はおよそ50件であるのに対して、1991年度は25件と例外的に少ないことを指摘し、この傾向が一時的なもので、人格研究減少の前兆でないことを祈ると述べている。今回の研究発表件数が前述のように例年並になっていることから、前回の減少は一時的なものであったと言えよう。ただ、人格部門は他の領域と密接な関連をもっているために、パーソナリティに関係すると思われる同じような研究が、あるものは発達部門にまたあるものは社会部門に入っていたりするので、発表件数のみによって研究動向の指標とすることはできない。したがって、研究論文の分類について本学会の指針のようなものが作ってあれば、年次による領域間の変動が少なくなるのではないかと考えられる。また、今回のプログラムにはセッションにテーマがつけられていなかったが、できれば各セッションにテーマをつけていただいたほうが、参加者にとって役立つと思われる。

パーソナリティ研究に関するこの1年間における最も大きなトピックスは、何といても1992年6月に発足した「日本性格心理学会」の創設であろう。この学会の活動と特徴について入会案内には次のように述べられている。「この会は、性格研究に関心をもつ者の集まりです。心理学に携わる者はもちろんのこと、精神医学などの医療に携わる者、文化人類学や民族学や経営学などの社会科学の領域に携わる者、あるいは教育学や社会福祉学などの教育や福祉に携わる者といった近接領域の研究者や実践家にも門戸が開かれています。また、ひとことで性格心理学と言っても、ある者は発達心理学や教育心理学から眺めますし、ある者は社会心理学から眺めます

し、ある者は心理臨床的に眺めようとするなどさまざまです。まさにこのようなカオス的な世界こそ、新しい科学の誕生の可能性を秘めています。」。学会の活動として年次大会の開催、ニューズレターの発行、機関誌「性格心理研究」の発行などの実施を計画している。このように、この学会は心理学という狭い範囲に限らず、性格研究を中心とした幅広い専門および学際的な領域との交流と、学部学生をも含めた若い世代の人達との交流を積極的にすすめることを意図しており、今後のパーソナリティ研究の発展に寄与することが大いに期待される。

パーソナリティに関する研究動向を回顧するにあたって、われわれは次のような範囲に限って紹介することにした。1992年10月に信州大学で開催された「日本教育心理学会第34回総会」の人格部門における口頭発表、心理学研究に関する機関誌として「教育心理学研究」と「心理学研究」およびその他の主要な心理学会の機関誌に掲載された論文の中でパーソナリティに関係すると思われる論文である。しかし、紙面の都合もあって総会の人格領域で発表された論文でも他の領域に近いと判断された場合はここでは取り上げないこととした。

パーソナリティ研究の領域は次のように分類して検討した。1. 類型、特性、2. 自己、自我、3. パーソナリティ・アセスメント、4. ソーシャル・サポート、5. 適応、6. その他。また、総会において口頭発表された論文はそれぞれ括弧内に口頭発表の番号を示し、その他の論文には年号を記した。なお引用文献は、総会における口頭発表以外の論文を掲載した。

1. 類型、特性

気質に関する研究として、若林(419)は、性格類型としての粘着性が「直接性」を共通の基本的特徴をもちながら、下位分類として「粘着タイプ」と「率直タイプ」に分類できることを心理テストによって検討している。大学生を対象として2つのタイプを選び、EPPSと認知型テストのEFTを実施している。その結果、EPPSにおいて粘着タイプは「秩序、持久」が高く、率直タイプでは「顕示、救護、変化、攻撃」が高かった。また、認

知型のテスト EFT では、反応時間にタイプ間の差が認められなかったが、両タイプとも他のパーソナリティタイプとは異なっていることから、粘着タイプの共通性と2つの下位タイプの存在が確認されたと報告している。

タイプAについての研究は、2つ上げられる。山崎(1992)は、幼児のタイプA特性と要求水準の関係について研究を行っている。日本版幼児用タイプA尺度(MYTH)を用いて幼稚園の教師による評定によってタイプAとタイプBの幼児を選び、実験課題としてa)要求水準の高さをみるボール投げ課題1、b)失敗の危険性を含むボール投げ課題2、c)競争性を導入した輪投げ課題の3種類の実験を実施している。その結果、ボール投げ課題1と輪投げ課題においてタイプA児が高い要求水準を示していたが、競争事態ではタイプA児とタイプB児に差が認められなかった。これらの結果から、幼児期においてすでにタイプAは要求水準が高く、このことは要求水準の高さがタイプAの形成の最初からそなわっている要素であることを示唆すると述べている。

大学生を対象にしたタイプAに関する研究として、清水・塩見(414)は、タイプAとその逆のタイプBの特徴をSPI(下田式人格検査)によって検討している。その結果、タイプAとは同調性格と、タイプBでは執着性格との関連性を認めている。

パーソナリティ特性と学業成績の関係について、松崎・西脇・瀧(443)は、看護学生を対象にして、1・2年次におけるEPPSと2・3年次の学習成績との関係について研究を行っている。成績の上位群と下位群を比較した結果、性格特性の変動は下位群の方が上位群よりも大きいこと、上位群は養護の欲求が高いので看護学生としての動機づけの高さに関係していること、下位群は独立的であるので対人場面での積極性と同時に不安定さにつながると思われることを報告している。

塩見・清水(401)は、いわゆる血液型と性格との関係および血液型を信じるものの性格的特徴について研究している。対象は大学生と大学院生でSPI(下田式性格検査)、血液型・星占いなどについての質問紙を実施した結果、血液型と性格との関係は全体として見られなかったが、血液型を信じるものは同調傾向がみられ、他人から接触しやすい人と見られることを望むが、信じないものは自分をしっかりした人と見られることを望む傾向がみられたという結果を得ている。

2. 自己, 自我

(1) 自己概念, 自己意識

高石(1992)は、前青年期および青年期前期の自己概念と、他者によってこのように見られていると思う自己

の姿との類似性を取りあげている。そして、各年代において誰が重要な他者になりうるか、それは発達のどのように変遷していくか、その際の他者のイメージはどのような性格を持ち、それらの相互関係はどのようなものかに検討をくわえている。被験者は小学4年生から中学2年生までの男女である。研究の結果、この期では重要な他者は両親から親友へと必ずしも移行しないが、男子は6年生で他者の影響を受けやすく、女子はこの年齢で既に他者に影響されない自己イメージを確立しているとみなされ、親友の重要性は学年を通して男子につき確認された。然し乍ら女子ではこの傾向は見いだされず、特定の重要な他者は思春期以降に求められるか、あるいは特定の他者と言うよりは多様な他者が影響を及ぼすといったことが推測された。対象別にみると、母親に対しては男女とも6割以上が肯定的イメージをもっているが、否定的イメージをもつ者は母親から否定的フィードバックを受けていると考えられる。また、先生は小・中を通じて比較的影響力をもっているようである。今後、性差を含めて自己概念がどのような時期にどのような内容をもつようになり、その際に影響を及ぼす他者は特定可能かどうかなどについて継続的な研究が期待される。

板尾・花田(1991)は、女子非行少年群は一般高校女子群に比較して低い自我発達を示すことをLoevingerの理論に従って吟味している。SCTによる自我発達の測定をおこない、その結果、女子非行群は衝動的段階と自己保護的段階でより多くの反応を、自己意識的段階ではより少ない反応を示すことを明らかにした。このことなどから、非行群は対照群に比べて低い自我発達段階にあることが分かった。しかし、非行問題の全てを自我発達の要因によって理解できるものではない。非行を行う少年の理解を深めるためには、更に社会的要因などとの関係についての考察が求められるであろう。

青年期におけるナルシシズム(自己愛)的傾向と両親の養育態度・家庭の雰囲気との関係を検討した宮下(1991)は、女子の場合、母親の暖かい受容的養育態度は自己愛的傾向を抑制し、否定的養育態度はこれを助長させるとしている。また、男子では父親の養育態度が支配的・介入的であると認知するほど、女子では暖かく受容的であると認知するほど、自己愛的な傾向が高いなどの結果を得た。自己愛的人格形成の研究において、これまで殆ど手がつけられていない性差の領域に興味深い資料を提供していて、今後の研究に待つところが多い。

伊藤(1992)は、自己意識が高まる青年期を対象にして、自己意識の在り方と理想自己と現実自己のずれとが自己受容を規定するメカニズムについて、発達の見地から検討を加えた。中学2・3年生と大学2・3年生を対象

として、現実自己と理想自己を求めるSD自己感尺度、生き方、性格、家庭、学校、身体能力の5領域についての自己意識尺度、公的自意識と私的自意識を含む自意識テストを実施した。結果として、現実自己と理想自己の差異、公的自意識及び自己受容の間の関係について発達的な違いが見いだされた。中学生では差異が大きいほど自己受容は低く、また自己受容に対して公的自意識は抑制効果、私的自意識は促進効果という逆の作用をもつことが示された。一方、大学生では、差異の自己受容に対する効果は傾向程度にとどまり、公的自意識と私的自意識の間では違いが見られなかった。これは大学生になると、むしろ自己価値観や自尊感情により自己受容が決定されるのではないかと考察がなされている。

愛着理論に基づき親子関係を検討した研究が、親への親和的で情緒的な愛着が青年期以降も継続し、その肯定的親子関係は自立性や個性化に促進的に作用するとして、心理的健康からみた自他への意識性を測定する自己意識尺度と、新たに開発した愛着尺度を実施した。愛着尺度は、自律性と心理的絆との2次元が測定可能になるよう構成されている。得られた資料の分析から、健康な自意識においては、自律性の高低に拠らず心理的絆の高い群が低い群よりも高得点を示し、絆の低い群の間では自律性の高い群が低い群より高得点を示した。このことから、親からの受容・発達課題に対する支持や葛藤からの自律、態度的自律が高いほど、健康な自意識の方へ働くことが見いだされた。愛着尺度の妥当性などについては再検討が望まれる。

社会的理想像、個人的理想像と現実自己の変化過程、そして両者の差異と自尊感情との関連から、社会化と個人化両過程の統合の側面を取り上げたのは伊藤(447)である。10歳代から40歳代にいたる年齢層の者を対象に調査を実施した。その結果、青年期に社会的規範から脱して独自の理想を作り出すのではなく、社会的規範を内面化し、それに合わせて自分自身の準拠枠を修正していく過程が示された。一方、30代までは理想と現実の差異が自尊感情に影響するが、以後この関連は弱くなり、理想像に囚われることから離脱する個人化の過程が示唆された。また40代では性差が見られることを明らかにし、女子は現実自己像、男子は個人的な理想の高さを自尊心の拠りどころにするという考察を加えている。

大野(445)は、現代青年の特徴(人から指示されないと動けない、主体性・独自性の欠如など)の原因と考えられる自律性・主導性の欠如にかかわる要因を明らかにしようとした。現代青年の特徴は漸成発達理論の立場からすれば、

早期幼児期の自律性、遊戯期の主導性の発達が阻害された結果であり、親の子に対する支配的態度を受けた青年は成績学歴尊重を受け入れるであろうという仮説を立てた。大学生を対象に調査して、自律性・主導性の低さと親の支配的態度、充実感の低さ、心理的離乳の困難さ、成績学歴主義との間に有意な関連が認められ、仮説を支持する方向の結果が得られた。こうした結果については、さらに縦断的な資料に基づく考察と検討を加える必要があるであろう。

自己意識の発達過程において、受験期の圧力がどのような影響を及ぼしているかをとらえようとしたのは塚野(448)である。方法として、過去、現在、未来の自己を対象として、それぞれの、受容、選択を問う継続的比較を用いた。受容、選択の説明要因として、友人関係、勉強、試験、受験、合格可能性、将来展望、不安などを含む81項目に回答を求めた。中学1年生と3年生の回答を検討した結果、学年差のあったのは、19項目で特に受験の要因に差が認められ、受験的圧力が3年生で強いことが示された。

(2) 自己評価

中学生の自己評価に及ぼす担任教師からの肯定的及び否定的フィードバックの効果を研究した樽木(1992)は、注目すべき結果を報告している。この研究では、ソシオメトリック地位を規定する15の行動項目に関する生徒相互の肯定的、否定的評価の教師によるフィードバック(伝達指導)が生徒の自信やさきの行動への自己評価に及ぼす効果が検討された。生徒の自信とは、彼らの自尊感情を構成する主要な要因としての意見表明、課題遂行、指導性の発揮の3場面に関する自信を指す。中学1年から3年生の7学級、男女が分析の対象とされた。まず学級ごとにゲス・フー・テストを実施し、全被験者に肯定的評価をフィードバックした。その後、2週間程度の間隔をおき、自己評定と担任教師による他者評定ともに自尊感情のレベルが高い被験者にのみ否定的評価をフィードバックした。主要な結果はつぎのようなことであった。a)肯定的なフィードバックは自信と自己評価を高めたが、その効果は高自己評価群についてよりも低自己評価群について大きいことが分かった。b)高自己評価群にのみ与えられた否定的フィードバックは、彼らの自信と自己評価を低めなかった。c)インパクトのある否定的評価のフィードバックを与えられた生徒は、否定的に評価された行動を改善しようとする構えを示した。この研究において、フィードバックを行うことで、担任教師がフィードバック前にはぼんやりとした印象しかもたなかった生徒について、フィードバック後に印象が明確になり、正確に捉えるようになったと回答していること

からも、この伝達指導は、担任教師により正確な生徒理解を深めるといったポジティブな効果も認められ、教育的にも示唆に富んでいる。

自己認知項目に対する正、負の理想的自己評定を基に、個々人の正、負の理想的自己の重要な次元を定め、そこでの自己認知が自己評定に強くかかわっていることを明らかにしたのは、遠藤 (1992) である。正、負の理想的自己評定において高い評価値を得た項目を個人にとって重要な項目、その他の項目を個人にとって重要でない項目とみなし、それぞれにおける正、負の理想的自己と現実的自己の差異得点と自尊感情得点との関係を検討した。個人にとって重要な項目での差異得点と自尊感情得点との間に強い相関関係が見いだされたのに対して、個人にとって重要でない項目では、相関関係はほとんどなかった。従来の研究の多くは、理想的自己を評価基準として考えてはいるが、研究者が設定した項目全体において認知された自己が、どの程度理想的自己からかけ離れているかという数量的指標は用いていない。そのことについての批判に立って、本研究から正の理想的自己とともに負の理想的自己においても、個人にとって重要な次元での自己認知が全体的自己評価に強く関わっていることが示唆された。

Tesser らの自己評価維持 (SEM) モデルは、人はポジティブな自己評価を維持しよう、あるいは獲得しようとする動機づけられているという仮説に立っている。櫻井 (1992) は、SEM モデルに及ぼす親和動機、達成動機及び自尊感情における個人差の効果を検討している。被験者としては大学生が用いられたが、高校時代のことを思い出してもらう調査方法をとった。そして、高関与科目と低関与科目について自分自身と仲のよかった友人の成績を評定させた。親和動機の高群は低関与よりも高関与科目において、自分と友人との成績評価の間に有意な差を示した。しかしながら、同様の差は達成動機と自尊感情の低群においては、高関与科目よりはむしろ低関与科目で大きかった。このような結果は、達成動機、親和動機、自尊心の個人差が SEM モデルに重要な役割を演じていることを示している。今後の課題として、関与度や個人差要因の測定法の工夫や性差の問題などが残されている。

自己評価的意識について、いくつかの側面と自己認知との関わりから、内的構造の検討を梶原 (444) が行っている。女子短大生を対象に調査した。そして、優越感や劣等感 は 自己の表面的ではっきりした特徴を他者と比較することで影響を受け、他者のまなざし意識は劣等感と重なり合う部分が大いと考えられるなどの結果を得ている。他者のまなざし意識の影響についてより詳細な

検討が望まれる。

(3) 自我同一性、モラトリアム

下山 (1992) は、日本の大学生のモラトリアムの状態をより分化した構成概念として把握し、その特色を明らかにすることを目的として、アパシーに相当する下位尺度をも含むモラトリアム尺度を新たに作成した。回避、拡散、延期、模索の4下位尺度よりなるモラトリアム尺度の妥当性は、この尺度と職業決定尺度とアイデンティティ尺度との関係から立証された。モラトリアムの下位尺度のなかで、従来の青年期発達論で論議されてきた拡散と模索については、ほぼ理論通りの結果がみられた。それに対して、我国特有のモラトリアム状態とされる回避と延期については、明確な関連性がみられなかった。このような結果がみられたことに関して下山は、日米の国状の相違から、我国においては大学入学後に職業決定を積極的に延期し、その延期した期間に思春期の発達課題である自由な役割実験を行うことがアイデンティティの確立あるいは形成に結び付く場合もあること、また逆に、職業決定課題に直面することで心理的混乱に陥るのを防御している場合は、アイデンティティの基礎も不安定なまま残されると推論している。いずれにせよ、我国の青年期の発達の特徴の究明は教育心理学の重要な課題である。

荻原 (434) は、プロテウスの人間の特性を測定する尺度を作成し、プロテウスの人間の持つ特性を、青年一般の特性と捉えることができるか、なおこの特性に適応と結び付く側面があるかを探索している。尺度から、柔軟な環境適応、変化、そして自信・自己信頼・可能性の3因子が抽出され、環境適応因子は大学生が高校生より得点が高かったし、大学女子で自我同一性と強い結び付きを示した。また、自信・自己信頼・可能性は大学女子以外の群で自我同一性と有意な正の相関があり、プロテウスの人間のある側面が適応的であることに結び付くとしている。

岡本 (446) は、自我同一性理論と成人期の発達に関する研究から、成人期における自我同一性の発達過程および、成人期の自我同一性の成熟にかかわる要因につき検討している。そして、発達の過程は同一主題を反復的に繰り返す、ラセン的に進行するのではないかと仮定して、自我同一性のラセン式発達モデルを提出している。この仮説に実証的検討を加えるため、中年期及び定年退職期の男女を対象に研究が進められた。その結果、青年期に獲得された自我同一性は、中年期及び定年退職期に再び危機を迎え、再度自我同一性が達成されること、それぞれの危機期には自我同一性再体制化の過程が認められることが示唆された。また、成人期の自我同一性の成

熟にかかわる要因として、成人期以前の心理社会的課題の解決、自我の高さ、心理的危機における主体的模索が深く関与していることが明らかになり、仮説を支持する資料が得られた。今後、こうした過程における性差の問題などについての追求が期待される。

(4) 自己開放性、自己開示性

Rogers や Rokeach らの理論と研究を概観したうえで西川 (1992) は、開放性と閉鎖性を両極とするパーソナリティ次元を仮定し、それは受容、接近、柔軟性の極と拒否、逃避、硬さの極から構成されている特徴があるとした。また、自己実現の視点から規定される精神健康性と開放性との関連性については、実証的研究がほとんどなされていないことなどを問題としている。そして、パーソナリティの開放性-閉鎖性の測定尺度として、経験質問紙を作成し、この尺度の内的-一貫性や信頼性を立証し、当初仮定された2因子を反映していることも認められた。また、解放性が自己実現の視点から規定される精神健康性、創造性と関連することが確かめられた。この結果は、解放性を精神健康性と創造性の接点を示す概念として位置づけるひとつの根拠を与えるものといえる。

また西川 (420) は、パーソナリティの解放性-閉鎖性をパーソナリティ統合化にかかわる要因としてとらえ、女子大生において開放性-閉鎖性と一体性-分離性の意識、自我統合性との関連を検討した。その結果、一体性と分離性の両面への意識の高まりは自我統合性と関連があり、特に開放的な者は閉鎖的な者よりもそれらの高さが自我統合性に関連することなどが伺われた。

中川 (1991) は、自己開示度とそれに伴う現実自己と理想的自己とのズレの変動を客体的自覚の喚起度、聞き手の態度、前もってもっていた現実自己と理想自己のズレの度合から説明しようとした。客体的自覚とは、自分自身を客体化し、自分自身に注意の焦点を向け、自分の気持ちや行動など自分に関する事柄に気が向いている状態をさす。そして、自己開示に関しては、客体的自覚が高い条件では、聞き手の受容的態度は非受容的態度より自己開示度を促進すること、現実自己と理想自己のズレの度合が小さい群の方が大きい群より自己開示度が高いことなどを明らかにした。またズレの変動に関しては、元々もっているズレが小さい群はどの変数の影響も受けずズレの変動が小さく、元々もっているズレの大きい群では、客体的自覚が高い条件下で聞き手が非受容的態度をとるとズレが拡大することなどを明らかにしている。

青年女子学生を対象に自己開示と孤独感との関係を検討したのは、榎本・清水 (1992) である。研究の結果、自己開示は人間同士の共感可能性への不信という意味での孤独感とは負の関係にあるが、人の個別性への気づきと

いう意味での孤独感と自己開示度との間には直接的関係はないこと、また人と人とは共感し合えと感じている者ほど自己開示度が高く、共感し合えないと感じている故に孤独感を感じている者ほど自己開示度が低いことがわかった。そして、自他の分化の未熟な者ほど自己開示するという見方は女子青年についてはあてはまらないとしている。

3. パーソナリティ・アセスメント

(1) 新尺度の作成

パーソナリティ測定に関する新しい尺度がいくつか考案されている。相川充 (1991) は、特性シャイネスを「特定の社会的状況を越えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と对人的抑制という行動特徴をもつ症候群」と定義し、シャイネスに関するいくつかの質問紙を参考として選択した36項目から因子分析、内的-一貫性などの項目分析の結果、最終的に16項目からなる特性シャイネス尺度を作成している。この尺度について再検査信頼性、性差の検討、自意識尺度、社会的スキル尺度、自尊心尺度などとの基準関連妥当性を検討している。さらに、他者評価やロール・プレイの印象評定との関連性などを尺度の妥当性検討のために実施しており、満足すべき信頼性と妥当性を得ている。

青年期の特徴として指摘されている「心を閉ざすこと」を測定する目的で、佐藤 (433) は、青年期内閉性尺度を作成している。この尺度は、最初につくられた26項目を項目-全体間相関や因子分析によって、「空想の愛好」、「他者からの刺激の回避」、「内省への沈潜」の3尺度21項目から成る新たな尺度を作成し、内的-一貫性や非社会性群と一般人との比較などによって信頼性と妥当性を検討している。さらに中学・高校・大学生を対象として同一性混乱尺度との関係をみた結果、同一性混乱が強いほど青年期内閉性尺度の得点が高くなることを示しており、多くの青年において青年期内閉性が防衛的な役割を果たしていることを示唆していると考察している。

中学生を対象にした学校内不安尺度が牧田・荒木 (425) によって作成されている。学校不安に関する領域として、テスト、学業成績、進路受験、授業、休み時間、部活動と委員会活動、教師との関係、生徒間との関係の8領域から47項目を作成し、全国の公立中学15校、6000を超える多数の対象に対してこの尺度を実施している。このテストについて項目-全体の相関、G-P分析、 α 係数、再検査などによる信頼性および児童用テスト不安尺度(TASC)と児童用学校質問紙(CSQ)との相関によって妥当性を検討し、信頼性と妥当性の条件を満たす結果が得られたと報告している。また因子分析の結

果では、学業成績と将来に対する不安、疎外感にともなう不安、自信欠乏にともなう不安の3因子を抽出している。

村井・村井・足立 (410) は、彼らがすでに作成した育児態度検査 (下位尺度: 神経質, 拒否的, 外向性, 統制的) の信頼性と妥当性について検討している。幼稚園児の母親を対象にして、信頼性では内的-一貫性および5か月の間隔による再検査信頼性を求め、妥当性については育児態度検査と MPI の下位尺度、障害児の母親の態度、保母による子どもの行動評定などとの関係について尺度ごとに調べた結果、信頼性と妥当性を支持する結果が得られたと報告している。

(2) 日本改訂版

外国で開発されたパーソナリティ測定尺度の日本版改訂が試みられている。石原・水野 (1992) は、Lennox & Wolfe によるセルフ・モニタリング尺度 (RSMS: Revised Self-Monitoring Scale) の日本版を作成している。この尺度は13項目からなる尺度で「自己呈示の修正能力」と「他者の表出行動への感受性」の2因子で構成されていると仮定している。大学生男女の資料について因子分析の結果、原著者と同様の2因子を抽出しているが、単一次元で説明できる可能性も否定できないと述べている。さらに、自己意識尺度、MPI、Y-G などの下位尺度との相関によって RSMS の内容について検討している。ただ最初に、これまでの日本における RSMS 研究で因子分析の結果抽出された因子は、必ずしも原著者の研究結果と対応していないと述べているが、この研究では何故それが認められたかという理由やこれまでの研究との違いについて言及されていないのは残念である。

大野木・中村・篠置 (403) は、Hewitt と Flett による多面的完全主義尺度 (Multidimensional Perfection Scale) の日本版を作成し、信頼性と妥当性について検討している。この尺度は「自己指向型」、「他者指向型」、「期待対応型」の3次元を想定しており、大学生、予備校生、および分裂病者の臨床群に対して下位尺度ごとに性差とグループ差を検討した結果、大学生群で性差と各因子で群間差が見られたこと、MPI と固執性検査 (KGMPs) との間に弱い相関があったこと、項目全体の内的-一貫性が高いことなどが報告されている。ただこのように各下位尺度を独立した要素として扱うのであれば、内的-一貫性は尺度ごとに求めるほうが合理的であると考えられる。

Spielberger による青年版テスト態度検査 (TAI) は「情動性」と「認知的懸念」の2因子が想定されているが、荒木・門脇 (421) は、これまでの結果では認知的懸念に関する項目との一致が少なかったことから、質問項目の改訂によって再度因子分析を行っている。その結

果、前回と比較するとかなり原版との一致が高くなっているが、認知的懸念の因子について意図したほどの結果が得られていないことや両因子に高く負荷する項目が多くみられることから、なお検討の余地があると思われる。

宮元 (422) は、Kuhl による Action Control Test (ACT) の90年改訂版の日本語版作成を試みている。このテストは、活動指向性-状態指向性の相対的な傾向を測定するもので、「とらわれ」、「躊躇」、「移り気」の3つの下位尺度から構成されている。大学生と専門学校生を対象にした調査で、尺度ごとの平均、内的-一貫性、尺度間の相関、因子分析などの点について検討しており、因子分析ではほぼ3つの下位尺度に相当する因子を抽出している。また ACS と気質検査、自己意識尺度、MPI などとの相関から尺度の内容について検討を行っている。

(3) 既存のテストの検討

すでに公刊されている心理テストの検討として、前田 (423) は、新性格検査 (柳井他, 1987) と EPPS (肥田野, 1970) の標準化資料の下位尺度における相関行列に基づいて、確認的因子分析法による分析を行っている。その結果、新性格検査では「情緒安定性」、「向性」、「秩序指向性」、「自己中心性」の4因子、EPPS では因子がやや多義的であるが、「自己中心性対他者への共感」、「外向対内向」、「自立性対依存性」、「保守性対進取性」の4因子による尺度の相関構造を示していると報告している。

宇恵・乾原 (402) は、30日間にわたる洋上大学セミナーに参加した大学生62名について乗船直後と下船前に P-F スタディ (青年用) を実施した結果を報告している。その結果、個々のカテゴリーでは O-D の減少と N-P の増加、評点因子では E の増加、M', I, I-I などが減少したと報告している。この研究は社会的順応性の変化を問題にしており、テスト自体の検討を必ずしも意図したものではないと思われるが、P-F に関するこの種の資料はほとんどないので、船上の集団生活が P-F 反応にどのような変化をもたらすかについて、さらに個人的な変化の様相を分析されることが望まれる。

このほか、パーソナリティ・アセスメントで注目されるのは、村上・村上 (1992) による MMPI およびその短縮版 MINI のコンピューター解釈システムの発行である。これは実施やスコア整理が簡便化されただけでなく、解釈内容も提示されているところに特徴があり、このシステムの使用によって今後の MMPI 研究の発展を促進することが期待される。また解説書には、MMPI の研究動向も述べられているので、この方面に関心のある者にとって大いに参考になると思われる。なおアメリカではすでに MMPI の改訂版として MMPI-2 が公刊

されており、いずれ日本版の作成が試みられると思われるが、これまでのさまざまな MMPI 日本版に対する批判を生かした標準化を期待したい。

4. ソーシャル・サポート

嶋 (1991) は、大学生のソーシャル・サポート・ネットワークに関する測定的研究を行っている。一般的な大学生にとって重要と思われるサポート・ネットワークとして父親、母親、兄弟、親友、恋人、同性の友人、異性の友人、先生など12人を定めた。そして、12項目のサポート・タイプな内容を表わす文を変数とした評定結果の因子分析を行い、第1因子は心理的サポート、第2因子は娯楽関連的サポート、第3因子は道具的・手段的サポート、第4因子は問題解決的サポートと命名された。12人のネットワーク・メンバーごとに因子得点を求めて各メンバーの持つ特徴を考察し、同性の親友と恋人が二大サポート源であることや性差はあまり見られないことなどを明らかにした。なお、個々の被験者の持っているサポート・ネットワークの様式や構造を個性記述的にとらえていく方法を提出している。

また嶋 (1992) は、ストレスとソーシャル・サポートを多次元的に測定し、どのようなストレスに対して、どのようなサポートが効果をもつかを明らかにしようとした。男子学生においては、同性の友人のサポートのみが有意な効果を持ったのに対して、女子学生では、異性の友人のサポートの一部を除いてすべてのサポートが有意な主効果をもち、ソーシャル・サポートの持つ心理的健康状態に対する主効果は女子の方に大きな意味を持つことが示された。また、家族サポートが女子の場合、心理的健康状態と最も密接な関係を持っている傾向がみられ、それは女子学生と家族との結び付きの強さを反映しているといえる。

堀野・森 (1991) は、ソーシャル・サポートと抑うつとの関係には達成動機が介在すること、しかも、競争的達成動機と自己充實的達成動機は異なった介在要因となることを明らかにしたうえで、抑うつと落ち込みの2側面とソーシャル・サポート及び2つの達成動機との関係を明らかにする目的で研究した。本研究の結果は、次の3点に要約される。自己充實的達成動機が高い場合は、日常的な落ち込みを感じるがあっても、抑うつを形成しにくい。競争的達成動機が高い場合は、落ち込みやすく、また抑うつを形成する場合もある。落ち込み・抑うつとソーシャル・サポートとの関係には、その個人の達成動機が介在する。これらの結果から、教育的援助もソーシャル・サポートの重要なひとつであるが、それが生かせるかどうかは個人の持つ達成動機の質によって異

なる点は十分に考察する意義が認められる。

5. 適 応

不安と対人場面の関係から対人不安を類型化する研究を菅原 (1992) が行っている。大学生を対象として、個別面接法によって不安場面の想起とその不安体験についての表現を求め、不安語の数量化理論第Ⅲ類による分析と不安体験事例のクラスター分析の結果、対人不安の表現語群と関連する対人場面を次のように2つのグループと4つの類型に分類している。「恥の意識」：Ⅰ. 恥辱の感情：社会的に受け入れられない自己が露呈した状況、Ⅱ. 照れの感覚：他者にとって馴染みのない自己像が露呈した状況、「コミュニケーション不安」：Ⅲ. 緊張感：人前の自分に自信が持てない状況、Ⅳ. 戸惑いや困惑：対人場面において役割が混乱した状況。この研究は、従来の対人不安の類型よりも総合的で体系的な分類を提示しており、今後の対人不安研究を進めるうえでの基盤を提供するものとして注目される。

また青年期における不安の研究として、山本 (1992) は、人間的成長にポジティブな成長不安とネガティブな抑制不安という不安の二面性について研究している。まず、2つの不安を測定するための尺度を作成し、因子分析、内的一貫性、臨床群への適用による妥当性、基準関連妥当性として実存心理検査、同一性次元尺度、理想－現実自己の差異などとの関連性、EPPSの達成動機尺度と成長不安との関係などを多面的に検討し、この尺度の信頼性と妥当性を得ている。次に、高校生と大学生を対象にして2つの不安に関して性差と学年差の面から検討した結果、高校生では成長不安で学年差、大学生では抑制不安で性差が認められており、これらの結果について自我同一性の観点から考察している。

松村 (1992) は、個人の属性としての不合理的信念の高さによって、役割として与えられる合理的または不合理的信念が、ある緊張状態における被験者の不安や結果の予測にどのような影響を及ぼすかを検討している。実験要因は、不合理信念、想像状況 (中性、緊張、リラックス)、緊張状態における役割としての信念と準備性であり、従属変数は自己報告の不安とゼミ発表の結果の予測である。その結果、属性信念の高い被験者は不合理的信念を与えられた場合、準備ができていないときに不安が高まる。一方、属性信念の低い被験者は準備のいかんにかかわらず合理的信念よりも不合理的信念の役割によって不安が高くなる。また、結果の予測については、役割信念の主効果は認められなかったが、属性信念が高くて不合理な役割信念群のほうが属性信念が低くて不合理な役割信念群よりもより望ましくない結果を予測する傾向

があった。これらの結果から部分的に仮説を支持していたと報告している。なお、この研究で実験要因として分析されている準備性について、論文の「問題」のところでその意義や仮説が述べられるべきではなかったかと考えられる。

抑鬱的な人は好ましくない出来事をその程度に応じて認知するのか、または一様に認知するのかについて、工藤 (1991) は、抑鬱的でない人と対照させて検討している。女子大生を対象に、抑鬱性は Zung による SDS (日本版) を用い、仮設場面は外見や性格をけなされる対人場面と心理テストや実技のテストに失敗する達成場面についてそれぞれ好ましくない程度が3段階に分かれている場面が設定された質問紙で、被験者に対して各場面について10段階の好ましくなさ7段階の自分にとっての重要性の評定が求められた。その結果、抑鬱的な人は好ましくない場面の程度を弁別せずに認知する傾向があり、抑鬱的でない人は場面の好ましくなさの程度によって異なった認知をする傾向があると報告している。ただし、著者も述べているように、場面想定が質問紙によってのことやそれらの場面が被験者にとってどれほど自我関与があったのかという方法上の問題が残されている。

堀野 (1991) は、達成動機と成功恐怖との関係について研究している。大学生を対象にして、達成動機の質問紙、成功恐怖については質問紙および仮想的実験場面での主人公の感じと主人公に対する周囲の感じについて調査を実施した。仮設場面の a) 女性がトップで男性が2番, b) 男性がトップで女性が2番, c) 女性がトップで男性が2番, d) 男性がトップで男性が2番という4つの条件ごとに重回帰分析を行った結果、成功恐怖が存在するのは実際の女性ではなくて、「競争的達成動機が高い男性における女性像」であるという興味ある結果を見いだしている。また、質問紙法と仮想的実験場面では異なった成功恐怖の場面を測定していることも指摘しているが、このようなデータの種別によって異なった側面をとらえる可能性はすべてのパーソナリティ研究において考慮すべき問題であろう。

生徒や学生の適応をとりあげた研究として、松田・佐藤・福家・行本・片山 (426) による小学生のいじめについての分析がある。小学5年生を対象にして、欲求と欲求不満耐性に関する質問紙といじめの経験や対策などについての自由記述による調査を行っている。その結果、いじめの経験群は欲求不満耐性が弱いこと、いじめられた経験群は友人に対する不満が高いこと、いじめ群は教師に対する不満を多くもっていることなどが示され、いじめの要因として規範意識、欲求不満、欲求不満耐性が関連しており、問題解決のポイントとして、学校と家庭の

連携や欲求不満耐性の育成が重要だと指摘している。

中学生が入学にあたってのもつ期待と不安について、小泉 (427) が調査を行っている。42項目の中学入学に関する期待と不安の質問紙、兄弟関係、学習不安傾向の調査を実施している。因子分析の結果、6因子が抽出されており、不安や不満については対人関係、学習、規制などに細分化されるが、期待についてはあまり分化していない傾向があると報告している。また兄弟の身近な情報源の存在が中学入学の期待や不安に影響することや、小学校における学習不安の強いものが中学での不安も強い傾向があることを明らかにしており、さらに入学後の追跡的研究が期待される。

三宅・陶山・三島・松本・米田 (441) は、大学生の悩みについての継続的な調査研究を行っている。144項目からなる悩みや不安に関する問題項目チェック調査票を用いて、多くチェックされた42項目について因子分析を行った結果、11の因子 (環境問題、情緒、友人関係、将来的職業感、向積極性、就学、金銭、異性観、人生への取り組み、人づきあい、外観) を抽出している。さらに、職業的同一性地位との関係をみた結果、地位に応じた悩みや不安の特異性が推測されると報告している。

大学生の孤独心性について、中川 (442) は、孤独感尺度 (LSO) とエゴグラム (TEG) を用いて検討している。LSO と TEG の分析では、両者ともほとんど年齢差、性差がなかった。LSO と TEG の相関では、孤独感尺度の理解と共感の高さが社会的適応性と関係していることや男女で相関のありかたが異なっていることを指摘している。

6. その他

岩井 (406) は、二人きょうだいの出生順位と性格との関係について報告している。長子的性格、次子的性格といわれるものが、きょうだいの性別の組み合わせや、兄弟、姉妹などの性別組み合わせによって異なるものかが検討された。同じ中学校に通う2人きょうだいで、兄弟、兄妹、姉弟、姉妹の各組の計209組が調査された。そして、長子的性格としてまとめた項目は、兄的とはかなり一致するが姉的とは異なり、次子的性格とした項目は、妹的とは一致するが弟的とは一致していない。姉弟の姉的と兄妹の妹的は、ほかの組み合わせのきょうだいの組み合わせよりも選択率が高く、姉的特徴、妹的特徴がはっきりしているが、弟的特徴はあまりはっきりしていないなどの結果を見いだしている。

青年の心理を理解するには、生活を彩っている感情である生活感情からのアプローチが必要であるとして、大学生が特によく感じている生活感情を調べて、それらの

間の関係を明らかにしようとしたのは落合 (416) である。まず予備調査として日頃感じている気持ちを感情名で表わすとどんな感情になるかを20答法で回答させた。それを整理して多くの者があげた30の感情を代表的な生活感情とした。次に本調査でそれらの感情をどの程度感じているかを5件法で調べ、そのデータをクラスター分析した。クラスターは大きく2つに分かれ、なおそれは幾つかの群に分けられる。そのうち、例えば第1群はいわゆる明るい感情、第2群は成就以前の追われている落着かない感情、第6群は一人になる不安、そして第7群は人に対する羨望の感情であった。このような感情間の構造の解明は、青年期の理解に新しい資料を提供するものである。

白井 (450) は、青年期が意識的に自己を形成し始める発達段階にあることに注目した。そこで、自己形成の主体としての青年を研究する立場から、青年の自己変容を促すような契機に働きかけることによって心理的機能の自己運動を人為的に作り出し、その心理的機能の因果関係を探ろうとする技法を開発して、変容確認法と名づけている。この方法は調査結果や研究者のコメントをフィードバックすることによって調査対象に変容をもたらし、さらにその変容の事実と理由について対象者の認知を確認していくのである。この技法に関する探索的な検討が試みられ、その有効性を立証する資料が示されているが今後の研究に期待するところが多いといえよう。

引用文献

- 相川 充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究 62, 3, 149-155.
- 遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係 ―重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討― 教育心理学研究 40, 2, 157-163.
- 榎本博明・清水弘司 1992 自己開示と孤独感 心理学研究 63, 2, 114-117.
- 堀野 緑 1991 達成動機と成功恐怖との関係 心理学研究 62, 4, 255-259.
- 堀野 緑・森 和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究 39, 3, 308-315.
- 石原俊一・水野邦夫 1992 改訂セルフ・モニタリング尺度の検討 心理学研究 63, 1, 47-50.
- 伊藤美奈子 1992 自己受容を規定する理想-現実の差異と自意識についての研究 教育心理学研究 40, 2, 164-169.

- 工藤恵理子 1991 抑鬱的な人の好ましくない場面の認知について ―好ましくない程度の認知の仕方― 実験社会心理学研究 31, 1, 23-30.
- 松村千賀子 1992 不安と予測に及ぼす不合理的信念の効果 教育心理学研究 40, 1, 10-19.
- 宮下一博 1991 青年におけるナルシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究 39, 4, 455-460.
- 村上宣寛・村上千恵子 1992 コンピューター心理診断法 ―MINI, MMPI-1 自動診断システムへの招待― 学芸図書
- 中川 薫 1991 自己開示およびそれに伴う現実自己と理想自己のズレの変動に影響を与える要因に関する研究 実験社会心理学研究 31, 13-30.
- 西川隆蔵 1992 パーソナリティの開放性-閉鎖性に関する研究 ―精神健康性, 創造性, 自己意識との関係について― 教育心理学研究 40, 1, 37-46.
- 大野 久 1992 人格研究の動向と課題 人格部門 教育心理学年報 31, 68-76.
- 桜井茂男 1992 自己評価維持モデルに及ぼす個人差要因の影響 心理学研究 63, 1, 16-22.
- 嶋 信宏 1991 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究 39, 4, 440-447.
- 嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究 7, 1, 45-53.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究 ―アイデンティティの発達との関連で― 教育心理学研究 40, 2, 121-129.
- 菅原健介 1992 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究 7, 1, 19-28.
- 高石浩一 1992 自己概念の形成に関わる他者 心理学研究 63, 1, 1-7.
- 樽木靖夫 1992 中学生の自己評価に及ぼす担任教師によるフィードバックの効果 教育心理学研究 40, 2, 130-137.
- 栃尾順子・花田知津子 1991 女子非行少年の自我発達水準の検討 ―Loevinger の自我発達理論に基づいて― 教育心理学研究 39, 3, 324-331.
- 山本誠一 1992 青年期における不安の二面性に関する実証的研究 心理学研究 63, 1, 8-15.
- 山崎勝之 1991 幼児のタイプA特性と要求水準 ―要求水準の基本的特徴とリスク・テイキングならびに競争事態におけるその変化― 心理学研究 63, 1, 51-54.